

## 第一章 郷土と時代

日本を構成する四つの島のうち、最も小さいのが四国である。その面積は約二万九千平方キロメートルで全国の五パーセントに過ぎないが、この島の南は太平洋の黒潮が洗い、北は日本最大の島である本州との間に波静かな瀬戸内海を挟む。その内海は、日本の重要な水路の役を果たし、その沿岸は古くから文化の栄えた地方であった。

われわれがいまからその生涯を追うことになる大平正芳は、この瀬戸内海に面する四国・香川県の三豊郡豊浜町に生を享けた。

豊浜町の四百九十六メートルの主峰高尾山の山頂に立つて北西に向かえば、この町の田園地帯を一望することができる。近くは、山の傾斜地につくられた溜池がそこかしこに点在し、秋には黄金色に波打つ田畑や果樹園が次第に下って、遠く瀬戸内の波打つ海岸線にまで広がる。

この田園地帯は、昭和三十年（一九五五年）、旧豊浜町と合併されて現在の豊浜町となるまで、和田村と称されていた。そして、この村の長谷ながたにという村落にある大平の生家は、いまもひっそりと昔日の面影をとどめている。

この和田村が今日のようなゆたかな土地となるには、何百年にもわたる村人たちの涙ぐましい努力があった。まず何よりも水利上の悪条件を克服しなければならなかった。香川県の面積は、小さい四国の十分の一、河川にも恵まれていない。雨量が少ないため、地表水も地下水も少なく、しかも山地の傾斜が急で、保水の条件はきわめて悪かった。このため、讃岐の人々は昔から、各所に溜池を築造し、冬のうから余水をためて夏の灌漑にそなえた。

和田村はとりわけ傾斜地が多い。新しく農地を拓くには斜面に鍬を入れる以外になかったが、そのことは同時に、溜池も山の中腹につくらなければならぬことを意味した。しかし、こうした困難にもかかわらず、住民の開発意欲は高く、『豊浜町誌』によると、和田村の農地開発は、江戸時代から、いまの豊浜町を構成する四つの地区（姫浜地区、和田浜地区、和田地区、箕浦地区）の中でも最も盛んだった。

耕地の拡大と並行して農業技術の改良、農産物の多様化も進んだ。良質の讃岐米が作られるようになり、この地の産物として知られる砂糖、綿花の生産も大幅に増加し、さらに藍、甘藷、菜種等の栽培も行われるようになった。またそれらの農産物を加工・販売する商工業も次第に発達した。温暖な気候と交通の便に恵まれて、この地方では農業の商工業化が比較的早くから始まっていたのである。

明治に入ると、農耕技術の進歩と農具の改善がはかられる一方、耕地整理、水利の改良が進められた。明治十七、八年（一八八四、八五年）頃には養蚕業が取り入れられて桑畑ができた。温州みかん、梨、ぶどう、柿等の果樹栽培も始められ、また甘藷、蔬菜等の栽培も盛んになった。

大平正芳は、明治四十三年（一九一〇年）三月十二日、この和田村の大字和田甲一〇八二番地で、父利吉と母サクの間に生まれた。

その祖先については、詳しいことは解らない。大平正芳自身は、次のように記している。

「大平家の古い家系は明らかでないが、戦国時代に土佐から移り住んで、このあたりを支配していた大平伊賀守国祐という豪族の末裔に当たるものようである。その居城があった城山（獅子ヶ端山）には、今でも城をめぐる石垣や泉の跡がある。」

……城主伊賀守国祐は、四国征服途上の長曾（宗）我部に追われて、家臣の下に身を寄せたといわれているが、その後の消息はさだかでない。嫡子は城山の南側にある「乳母ヶ懐池」に乳母に抱かれて入水、息女は豊浜町の「姫浜」の沖に身を投げてあえなく果て、弟だけ災禍を免れてこの地に落ちついたという。国祐の菩提寺「国祐寺」は、今なお大平姓を名乗って法燈を守っている。

正芳の祖父岩造は大平総本家の分家に生まれ、明治に入って村会議員などをとめた。父利吉は岩造の次男だったため、これからさらに分家して新しく一戸を構え、一町二、三反の田畑を自小作する中農だった。利吉は、岩造と同じく村会議員や溜池の水利組合の総代等をつとめ、よく人の世話をした。水利組合とは、溜池の水を利用する農家が村落横断的に形成する組合で、水利総代とは村落の役職とは別の「顔役」である。利吉は五十町歩ほどを灌漑する野々池という溜池を差配する村の有力者だったと考えてよい。

そのことは、父についての大平の描写からもうかがうことができる。

「父は、明治三年生まれで、これという学歴はなかった。しかし、一応書はよくするし、和漢の古典にも相当通じていた。和綴の本のところどころに、朱の紙片が貼付してあった。これは、そのくだりに疑問がある印で、疑問が解けるとその紙片をそつととり、本自体は、全然汚さないように配慮されていた。」

……父は酒が好きで、晩酌を欠かさなかった。また割合交際が広く、人に招かれることも多かった。村落の店から盆暮の決済で日用品を掛買する通帳には、三銭とか、五銭の豆腐やあげの買入れの記載にまじって、一円二、三十銭の清酒が、大体、一週間ぐらいの間隔を置いて記入されていたことを覚えている。」

また、大平は母についてはこう記している。

「母は隣の大野原町の詫間家の長女で、どちらかという社交性をもった勝気な女性であった。当時、詫間一家は朝鮮に移住し、慶尚北道迎日郡の大松面というところで雑貨商を営み、伯父はその面長（村長）をしていた。ただ祖母だけは、どうしたことが独りで留守宅を守っていた」。

正芳の姉、ムマの両親に関する思い出は次のとおりである。

「父は几帳面な人だったが、私たちは父から怒られたり、怒鳴られたりしたことがなかった。子供たちが勉強していると、ランプを磨いてそばに寄せてくれるし、帽子を忘れたら自転車を追ってきてくれたり、そりややさしかった。人望があつて、なんかもめ事があると、飛び出して行って、わしが行くとまとまるんじや」と言つておつた。父はその頃には珍しく、よく母と連れだつて出かけた。むしろ母がきびしかった。男まさりで、本家の兄ちゃんもかなわんと言つておつた。それでも他人には親切で、子供が遊んでいると、お餅の切つたのを揚げて、お砂糖で丸めて、誰それおいでと言つて、食べさせておつた」。

正芳が生まれるまでに、父母はすでに五人の子供を儲けていた。キク、信雄、テツ、ムマ、数光の男二人、女三人である。キクは満一歳、信雄は二歳半で夭折したので、正芳が生まれたときには、テツ、ムマ、数光の三人の兄姉があり、正芳のあと、一年半後に芳数、さらに四年後に富江が生まれた。

その頃の大平家の生活内容はどのようなものであつたか。

大平自身によると、「米麦を主とする当時の農家の家計は、けつして楽ではなかつた。私のうちは、子供が六人（男三人女三人）もいたのでなおさらであつた。私はもの心がついてから、漬で袖がピカピカ光っている着物を着て、稲藁で作つたぞうりをはき、一汁一菜に麦飯（もちろん米が三、四分入っていた）を食べて育つた。海浜辺くに住みながら、鮮魚にありつくのは祝祭の日くらいで、たまに食膳に見かけるものは、鰯や鯖の干物であつた」。

もつとも、当時は麦飯はとくに貧乏のシンボルだったわけではない。『和田村の実相』という文献には、「明治〜大正初期は、米一〜三に、麦九〜七を混ぜた麦飯が中心で、年代が下がるにしたがって米の割合が多くなり、大正〜昭和初期には米四〜八、麦六〜二、そして昭和初期になっても、この混合された麦飯を主食とする家がなお七五%はあった」とある。

以上の記述から、その頃の大平家は、村では中流の生活をしていたのではないかと考えられる。だが、むろん、それは今日の農村の生活水準から見ればはるかに低いものであった。しかも、その低い水準を支えるために、どの農家も老人から子供まで一家を挙げて働かなければならなかったのである。

大平正芳が呱呱の声をあげたこの頃、世界は、列強による植民地分割が一応の限界に達し、各地の民族主義がようやくその高まりを見せていた。日本にとっては、日露戦争（一九〇四〜〇五年）の勝利のあと、明治の終焉を前にして、一つの大きな曲り角にさしかかっていた時である。

それは、外には日本が満州経営、朝鮮併合と西欧列強に倣って植民地経営に乗り出すとともに、久しきにわたる日本の悲願とも言うべき不平等条約の改正に成功し、関税自主権の回復もあいついで実現した時代であった。一方、内には、日露戦争中に軍需に刺激されて飛躍的にその技術力を高めた機械工業が、日本の工業化を一層推進したが、これに伴って労働問題が激化し、社会主義運動とそれをめぐる国内の対立が激しさを加えた時代でもあった。

だが、もとより、当時の香川県、しかも都市から隔離された農村の生活や精神の状況は、中央に比べればまだまだ遅れたものであった。そこには、古い、土地にしがみついて生きねばならぬ人々が、江戸時代とさして変わらぬ生活様式の中でひっそりと暮らしていたのである。

そのような時代、そのような環境の中に生まれた大平正芳の最も古い記憶は次のようなものである。

「私の額には、ちょうど真中どころに、長さ一吋弱の相当深い傷跡が、左右に走っている。子供のときには、それが余程深かったとみえて、随分気を揉んだ記憶がある。写真を撮っても、その傷跡が鮮明にと謂われぬまでもいつも痕跡を止めていたものであるが、成長するにつれて余り目立たなくなつて来た。

それは私が三、四歳の頃のことであるが、……この傷を受けた場面だけは不思議によく覚えている。当時私の家におしげという女中がいた。……その女中が私を背負つて門の前の川の端で遊んでいた。ところが何のはずみか、私を背負つた儘向き直つた瞬間に、私の顔を田を囲む石畳の角にぶつつけてしまった。私の顔からは鮮血が淋漓とほとばしり出たものである。ちょうど野良仕事から帰りかけの母が、狂いそうな顔付で、私を抱えて家の中に運びこみ、お灸の艾か何かで応急の手当てをしてくれた。

おしげさんは、その後二、三年は私の家で働いてくれたが、やがて村はずれの小さい旗亭の酌婦になった。それでも度々私を連れに来てくれたので、私はしょっちゅうその旗亭に招かれざる客となつていた。それから暫くして、おしげさんは病んで死んでしまった。

これが私の生まれ落ちてからの最初の淡い思い出である。その旗亭は、昔ながらの藪に囲まれて、昔のままの姿で残っている。この淡い思い出が、私にとっては、年月を経るに従つて、益々濃くなつて行くような気がする。

この文章は、「額の傷」として題して、大平正芳が昭和二十八年に処女出版した書物の冒頭に掲げられている。幼年時の彼の心象風景を窺つていける。

正芳は五歳の頃、生家から少し離れた家に里子に出されたことがあつた。子供のない家や少ない家が、子供の多い家から「里子」をとるのは、当時の農村の相互扶助の風習であつた。大平はのちに、従兄の一人に、「あんまり悪さをするので一週間ほどして免職になつて帰されたがね」と語つたことがある。たとえ一週間にせよ生家を離れた経験はよほど辛いものであつたのだらう。そのためか、大平はごく親しいものにばかり

とこの事実を打ち明けただけであつた。

口べらしのもう一つの方法は、娘を早く嫁にやることである。正芳の姉テツは、十六歳で、隣の大野原村の山田家に嫁入りしている。

正芳は、テツが嫁いだときのことを記憶している。彼が六歳の冬である。

「姉の嫁ぐ日は冬の寒い日であつたが、箆笥や長持をかついで行く一連の行列が、私の村はずれの長い坂をいくつもの提灯を提げてゆっくり上つて行くのであつた。私は、この行列に参加したくてたまらなかつたと見えて、その跡をどこまでも追つかけた。本家の従兄が、執拗に行列を追いかける私を抑えて引返してくれたが、私は尚も頑強に抵抗したことを覚えてゐる」。

テツは数年して体をこわし、二人の幼児を残して死んだ。後添いとしてテツの妹ムマが迎えられた。姉が結婚した時とほぼ同じ年齢であつた。